

New Products Review

これは買い!?

気になる新製品をいち早くテストする!



100BASE-TX搭載で機能アップしたIPルーター

NetGenesis Dual

スタイリッシュで発色がキレイな150万画素デジカメ

FinePix 1500



外部ストロポにも対応した230万画素3倍ズーム機

FinePix 2900Z

ファイアウォール機能を搭載したThinサーバー

Cobalt Qube 2



テレビ番組をMPEG2形式で録画できる

**バイオRシリーズ
PCV-R70**

最低価格レンジのメーカー製PCサーバー

**MAGNIA
LiTE10/S450AN**

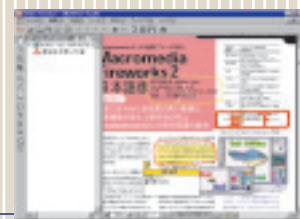


日本初の赤外線ポートを持った携帯電話

**DoCoMo NOKIA
NM207**

あらゆるドキュメントをPDFファイルに変換

**Adobe Acrobat
4.0 日本語版**



100BASE-TX 搭載で機能アップしたIP ルーター

NetGenesis Dual

Check!

TA やモデムをつなぐだけでルーターに4ポートの100BASE-TXハブを搭載ガッチリ安定感のある筐体デザイン



| | |
|---|-----------------------------------|
| 発売元 | 株式会社マイクロ総合研究所 |
| 価格 | 25,800円 |
| 問い合わせ | 03-3458-9021 |
| 付属品 | ツイストペアストレートケーブル(3m) 1本、ACアダプター |
| http://www.mrl.co.jp/ | |

デザインを一新してルーターらしい筐体になった。前面には4ポートハブのランプと、シリアルポートの通信状態を示すランプが2つある。



NetGenesis 4が発売されてからはや1年。シリアルポートでTAやモデムと接続して使う新しいジャンルのルーターが定着してきた。NetGenesis Dualはアップデートで進化したNetGenesis 4の基本性能を受け継いで強化した新モデルだ。

TAをつないでルーターにする発想

TAやモデムを持っているのだから、それを使ってルーターにしようという発想で生まれたのがNetGenesisだ。新たにルーターを購入するよりコストが抑えられるだけでなく、電話機能の優れたTAと組み合わせれば、それぞれの良さをうまく合体できるというわけだ。ルーターとしての機能では、NAT+、IPマスカレード、DHCP、ファイアウォール機能などをサポートし、ISDN、専用線、アナログ専用線、アナログ公衆回線など多様な回線に対応するなど、ISDNダイヤルアップルーターと比べても遜色ない機能を持つ。

NetGenesis 4の欠点を改善

NetGenesis 4は同社のモデムと同じ小さな筐体だったので、シリアルポートにミニDIN8ピンが使われていてケーブルが抜けやすいという問題があった。NetGenesis Dualは鉄製のどっしりとした筐体になり、シリアルポートは通常のD-SUB9ピンに変更されている。電源スイッチもしっかりとしたものになった。内部的にもフラッシュメモリーを倍加し、今後のアップデートへの万全の備えを施してある。

また、100BASE-TXの4ポートハブを備えた点は注目だ。ISDNルーターでさえまだ進んでいない100BASE-TX化に率先して取り組んだ意味は大きい。また、自宅で使うのなら100BASE-TX4ポートハブで十分だ。

試用レポート

① TAとモデムでインターネットに接続
V.90対応モデム「MR560XL」とNECの「AtermIT75」を使ったインターネットアクセスを試みた。設定には「セットアップユーティリティ」を使う。ウィンドウズのモデム定義ファイルを使う方法なので、ATコマンドを調べて打ち込む必要はなくて簡単だ。モデムの場合にはつながるまでに少し時間がかかるが、TAの場合はスムーズ。ISDNルーターと大差ない環境だ。なお、ルーターはどんなOSでも使用できるが、設定にはウィンドウズが必要だ。NetGenesisのメーリングリストには、Virtual PCを導入したマックで設定できるという情報もあった。

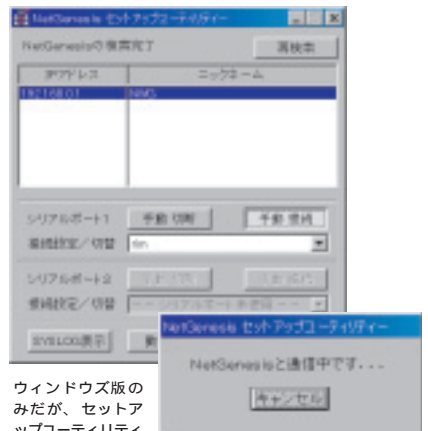
② メール共有機能は使えるか？

新機能のメール共有機能は、1つのメールアドレスを複数で共有する機能だ。NetGenesis DualがメールのPOPを中継して、to:ヘッダーに含まれる名前で「仕分け」する仕組みといってもよい。ただ、メールアドレスが安価に手に入る今では、あまり実用的な機能とはいえない。

一方、SNTP (Simple Network Time Protocol) 対応は便利だ。インターネット上のタイムサーバーを指定しておくだけで、ルーターの時刻がいつも正確になるし、その時刻にパソコンを合わせることもできる。



NetGenesis 4で抜けやすいと不評だったミニDIN8ピンから、通常のシリアルと同じD-SUB9ピンコネクタが採用された背面。



ウィンドウズ版のみだが、セットアップユーティリティで簡単に設定できる。

③ 今後の機能追加にも期待

フラッシュメモリーが増えたからには、気になるのが今後のアップデートだが、日程ははっきりしてないもののNetGenesis 4で懸案だったWWWブラウザでの設定や、仮想COMポートなどはすでに予定に入っているとのことだ。

アナログ回線でルーターを使いたい、アナログのリモートアクセスに利用したい、便利な最新TAを使いたいというユーザーにおすすめの、ちょっとユニークなルーターだ。
(梅垣まさひろ)

| | |
|-------|--|
| 発売元 | 富士写真フイルム株式会社 |
| 価格 | 62,800円 |
| 本体寸法 | W104 × H69 × D31mm |
| 重量 | 195g (本体のみ) |
| 問い合わせ | 03-3406-2981 |
| 付属品 | 単3形ニッケル水素電池2本、充電器、 ハンドストラップ、専用ビデオケーブル |

http://www.fujifilm.co.jp/news_r/nrj450.html

カメラとして親しみやすい横型になり使いやすくなったボディ。自動開閉のレンズ保護バリアーも内蔵され、画質やレスポンスも向上している。



ステータス表示の液晶パネルが省略され、すべての情報は液晶モニターに集中表示される。基本的な操作性は従来と同じだ。



女性ユーザーを意識して、ジュシーオレンジとミントグリーンのカラーバリエーションも発売される。

富士写真フイルムから150万画素のFinePix 1500が発売された。大ベストセラーとなったFinePix 700をブラッシュアップしたモデルで、バッテリーが専用リチウムイオンから単3形ニッケル水素2本になったほか、スタイルもカメラらしい横型デザインとなり、シルバーメタリックだけでなく、ミントグリーン、ジュ

スタイリッシュで発色がキレイな150万画素デジカメ

FinePix 1500

Check!

スタイリッシュなスリムボディー
記憶色重視の鮮やかな色と豊かな階調
電源は単3ニッケル水素電池2本

信号処理回路にも新しい技術や、より高速のパーツが使われている。たとえば、FinePix 700は電源を入れてから撮影スタンバイ状態になるのに8秒~10秒近くかかっていたが、FinePix 1500では約4秒~5秒で起動し、6秒後にはシャッターが切れる。また、メモリーカードへの記録時間も約5秒で、軽快とまではいかないがストレスなく使える。

電源も、専用リチウムイオンバッテリーから単3形ニッケル水素充電電池2本に変わったので、不意の電池切れの際でもとりあえずアルカリ電池で急場をしのぐことも可能。スタイルもカメラらしい横型になったので、誰にでも親しみやすく、使い勝手も良い。

ーシーオレンジといったファッショナブルなボディカラーも用意されている。

画素数は同じ150万画素でも去年のモデルとは熟成度が違う

FinePix 1500は、1/2.2インチ150万画素CCDを搭載した単焦点のデジタルカメラだ。200万画素のデジカメばかりが目を集めがちだが、銀塩プリントサービスやポストカードサイズ専用の昇華型プリンターで有効に活かせる画素数は、せいぜい130万画素前後だ。もちろん、画素数が多ければ多いほど大きくプリントしたときに有利だし、トリミングしても実用的な画質を保てるので、画素数が増えていくのは決して無意味なことではない。しかし、使用目的やパソコン環境によっては、コストパフォーマンスが高く、パソコンにも負荷の少ない130万~150万画素クラスのデジカメが適しているケースもあるのだ。

とりわけFinePix 1500は、画素数はFinePix 700と同じ150万画素でも、CCDの世代が上がって特性も向上しているし、内部の

試用レポート

①記憶色を重視した鮮やかな色と
雰囲気を活かすホワイトバランス

昨年のFinePix 700は、測色的な色再現を重視した設計で、しかもホワイトバランスが太陽光に固定されていたので、シーンによっては色カブリで発色が悪くなったり、樹木の緑がくすんで写ることがあった。しかし、FinePix 1500は、230万画素のFinePix 2700と同様、記憶色を重視した彩度の高い鮮烈な発色だ。35万画素のClip-Itシリーズの鮮烈な絵づくりが戻ってきた感じた。階調の再現もなめらかで、コントラストの高いシーンを撮影しても、白飛びや黒つぶれで絵が破綻してしまう心配はほとんどない。

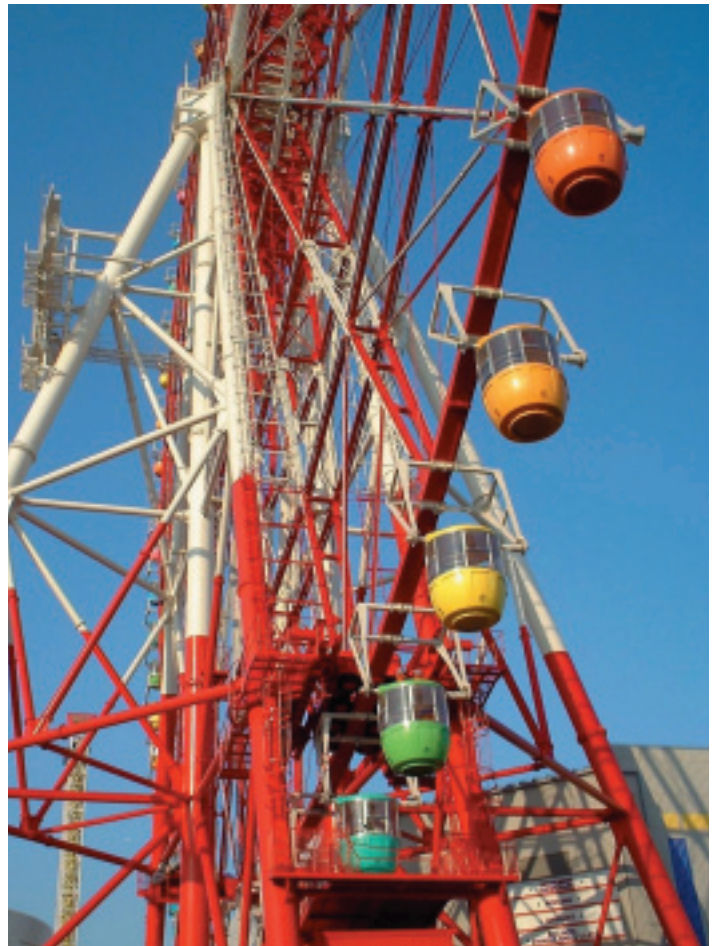
また、FinePix 2700で採用されたシーン自動判別インテリジェントAWBを搭載している。光の色カブリを完全に除去せず、わずかに残すことで、その場の雰囲気を活かした撮影ができる。色と階調については、ほぼ文句なしの出来だ。



露出アンダーにならないようプラス側に露出補正をして撮影。こういった黄色い花を直射日光下で撮影すると白飛びを起こしやすいものだが、FinePix1500は階調がなめらかで、しかも中間調のメリハリも損なわれていないのは見事だ。



あまり低照度に強くないものの、日没から20分～30分後なら、かろうじて空の明るさが残っているので、雰囲気のある夜景を撮影できる。FinePix700よりも若干ながら感度が上がっている感じた。



昨年のFinePix700に比べると、色のくすみが少ない、非常に鮮やかに発色するようになった。シャープネスも向上しているの、フジ独特の輪郭の不自然さはだいぶ目立たなくなっている。

① FinePix1500と2900Zに搭載されたユニークな新機能

FinePix1500と上位機のFinePix2900Zには、新しくベストフレーミング機能とマップビューワー機能が搭載されている。

ベストフレーミング機能は、フレーム枠を液晶モニター上に表示する機能で、この枠を目安にフレーミングすることで、バランスの良い構図で撮影できるというものだ。構図の基本ともいえる縦横3分割フレーム、風景をバックにした記念写真に最適な記念写真フレーム、バランスの良い構図で人物を撮影できるポートレートフレームの3種類があり、背面の液晶表示モニターボタンを押すたびに、トグル表示される。

また、マップビューワー機能は、インクリメントP製地図ソフト「MapFan」のデータをスマートメディアに取り込んで、液晶モニターに地図を表示させたり、撮影地の緯度や経度を撮影した画像に記録したりする機能だ。逆に撮影した画像データをMapFanに取り込んで地図上に表示すること

も可能だ。また、パイオニアのカーナビゲーションシステムで、この位置情報をもとに地図を表示したり、撮影画像を呼び出したりすることもできる。

カメラにGPS機能を内蔵しているわけではないので、あらかじめ撮影地の地図をスマートメディアにコピーしておく必要があるが、デジカメを地図代わりに利用できるのはなかなか便利だ。

② 予想以上にもつバッテリー

FinePix1500は電源として単3ニッケル水素充電電池2本を使用していて、バッテリーチャージャーと1450mAhの高容量ニッケル水素充電電池2本も付属する。ニッケル水素とはいえ電池が2本ということで、バッテリーのもちが非常に気になったが、液晶モニターをオンにして撮影しても、50枚以上は楽々撮影できた。メーカーの資料では、液晶オンで約110枚、液晶オフで約400枚の撮影が可能という。

そんなにたくさん撮影しない人なら予備電池なしでも大丈夫だ。

ただ、同梱のバッテリーチャージャーは充電に時間がかかるので、1日に何百枚も撮影するヘビーユーザーなら2時間～3時間で充電できる高速チャージャー付きのニッケル水素充電電池をもう1セット購入しておくのがベストだ。 (伊達淳一)

FinePix1500

| | |
|-------------------------------|---------------------------------------|
| レンズ | 38mm相当(35mmフィルム換算) |
| CCD | 1/2.2インチ約150万画素CCD |
| 記録メディア | スマートメディア(3.3V) |
| 最多記録枚数(32MB) 1280×1024ピクセル | Fine48枚、 Normal94枚、Basic180枚 |
| 最短撮影距離 | 約10cm |
| 絞り値 | F2.6/F7.2自動切り換え |
| シャッター速度 | 1/4～1/2000秒 (メカニカルシャッター併用) |
| 露出制御 | TTL64分割測光プログラムAE (マニュアル撮影時の露出補正可能) |
| 露出補正 | -0.9EV～+1.5EV(0.3EVステップ) |
| 内蔵ストロボ | 自動調光方式(発光モード:オート/ 赤目軽減/強制発光/発光禁止) |
| 液晶ファインダー | 1.8インチD-TFDカラー液晶 |
| 電源 | 単3形ニッケル水素電池2本、充電器 |

外部ストロボにも対応した230万画素3倍ズーム機

FinePix2900Z

Check!

200万画素ズーム機としては戦略的な価格設定
外部ストロボやコンバーターレンズが使用可能
液晶モニターに地図表示できるマップビューワー機能

| | |
|--|--|
| 発売元 | 富士写真フイルム株式会社 |
| 価格 | 99,800円 |
| 本体寸法 | W129.5 × H68.5 × D59.8mm |
| 重量 | 345g (本体のみ) |
| 問い合わせ | 03-3406-2981 |
| 付属品 | 充電式バッテリー、ACパワーアダプター、ハンドストラップ、レンズキャップ、専用ビデオケーブル |
| http://www.fujifilm.co.jp/news_r/nrj450.html | |

APS一眼レフを思わせる硬派なフォルムのマグネシウム合金ボディ。内蔵ストロボは手動ポップアップ式だ。



背面の十字キーは十字配列のボタンに変更されているが、基本的な操作性は従来のFinePixシリーズを踏襲している。



上面から見たFinePix2900Z。背の高さが低く抑えられているので、写真で見るとはコンパクトだが、ボディの厚みは結構ある。

富士写真フイルムから230万画素CCD搭載の3倍ズームモデル「FinePix2900Z」が発売された。APS一眼レフを思わせる硬派なフォルムで、ボディ素材として堅牢性の高いマグネシウム合金を採用。プログラムAEだけでなく、2段階の絞り優先AEやマニュアルのシャッタースピード選択機能、

外部ストロボ対応といった写真を熟知したベテランユーザー向けの機能も備えている。

また、200万画素3倍ズーム機としては初めて10万円を切る戦略的な価格設定で、しかも2900Zという200万画素級で最上位機を示唆するネーミングからもメーカーの意気込みが感じられるデジタルカメラだ。

オプションのアダプターリングでワイコンやフィルターも装着可能

レンズは35mm～105mm相当の3倍ズームで、レンズの明るさはF3.3～5.0。ライバル機種に比べて1絞りほど暗いが、フレアが少なくキレの良い描写が得られる。最短撮影距離は90cmで、マクロポジションでは25cmまで近寄れる。

オプションで28mm相当のワイド撮影ができるワイドコンバージョンレンズが用意されていて、付属のアダプターリングを使って43mm径の市販フィルターも装着可能だ。アダプターリングはワンタッチで着脱できる。

CCDは1/2インチ230万画素。記録画素数は1800×1200ピクセルおよび640×480ピクセルで、デジタルズームとリサイズ時には1280×1024ピクセルで記録される。記録メディアは3.3Vスマートメディア（メディアは別売）で、デジタルカメラの業界標準であるDCFおよびDPOFに対応。プリントするコマや枚数だけでなく、トリミングの指定もできる。

電源は、FinePix2700と同じく専用タイプのリチウムイオンバッテリーで、付属のACアダプターをカメラ本体に接続しておけば、7時間～8時間で充電が完了する。予備バッテリーを何本も使うヘビーユーザーなら、約1時間で充電できる別売の急速バッテリーチャージャーがおすすめだ。

試用レポート

① 基本操作は従来の

FinePixシリーズを踏襲

FinePix2900Zの操作は、従来のFinePixシリーズと基本的には同じだ。メニュー操作が十字配列のボタンに変更されているが、十字キーに比べて特に操作性が変わったという感はない。ただ、液晶モニターがボディの上部にあるので、カメラのステータスを確認するのが面倒になった。FinePix2700からは、電源をオフにしてもマクロポジションの設定を保持するようになったが、液晶パネルを確認しないとマクロポジションかどうか分からないので、うっかりマクロポジションのまま遠景を撮影してしまうことがあった。もっともマクロポジションのまま遠景を撮影しても、ピントがまるで外れてしまうことはほとんどなく、実用上は



シーン自動認識オートホワイトバランスで、夕陽も印象的に撮れる。太陽の周りのグラデーションがわずかに黄色っぽく変化しているが、他社の200万画素デジカメではもっと不自然に写りやすい。



今までのFinePixシリーズのなかで、もっとも硬調な描写で、黒がピシッと締まっている。パッと見た目にはインパクトがあってシャープに見えるが、コントラストの高いシーンでは要注意だ。



マニュアルモードでは最長3秒までのスローシャッターが設定できるので、これまで撮影できなかった夜景も狙える。ただ、長時間露出になるほどスポットやノイズが増加する。



もりの日などフラットな光のもとでは、適度なメリハリがあって、非常にきれいに撮れる。ただ、細部描写力はいまひとつなので、犬の毛並みが部分的につぶれている。解像力より階調で見せるタイプだ。

問題ないようだ。

ストロボはポップアップ式になり、ストロボ撮影をしたいときは、ボタンを押して手動で上げる必要がある。不用意にストロボを発光させてしまう心配がないので、個人的にはこのほうが好ましいが、できる限りカメラまかせで撮影したい人には少し面倒になったかもしれない。

起動レスポンスは約6秒で、電源を投入した直後の再起動は約4秒半。シャッターインターバル(シャッターを切ってから次のシャッターが切れるまでの時間。FINEモードで測定)は約8秒だ。

① FinePix2700 に比べると 黒が締まる硬調な絵づくり

FinePix2900Zに搭載されているCCDや信号処理は基本的にFinePix2700と同等だが、両者の写りはずいぶん違う。FinePix2700は非常に階調が軟らかで、コントラストが高いシーンでもシャドウ部がつぶれにくい。これに対してFinePix2900はレンズのフレアが少ないため、シャドウ部がピシ

ッと締まり、非常にメリハリのある絵が撮れる。ただし、シーンによってはコントラストが高すぎてギスギスとした感じに写ることもある。どちらの絵づくりがいいかは人それぞれの好みだが、個人的にはもう少しマージンのある軟らかな階調が好みだ。

ところで、35万画素のClip-itシリーズは、夜景もきれいに写すことができたが、FinePixシリーズになってからは暗いところに弱くなってしまった。しかし、FinePix2900Zは、3秒~1/1000秒まで1/3段階ステップでシャッタースピードを手動で選択できるので、これまで撮影できなかった夜景も写せるようになった。

① 原色CCDのクリアな色と 的確なオートホワイトバランス

FinePix2900Zには、シーン自動認識オートホワイトバランスが搭載されていて、光の色カブリを完全に補正してしまうのではなく、わずかに光の色を残すこと

で雰囲気伝わる写真が撮影できるのが魅力だ。マニュアル撮影モードに切り替えれば、6種類のプリセットホワイトバランス(太陽光、曇天、蛍光灯1・2・3、白熱灯)も設定でき、光の色を作画に活かすことができる。原色CCDならではのクリアな色再現と、シーン自動認識オートホワイトバランスが組み合わせあって、色に関してはほとんど不満を感じることはない機種だ。

(伊達淳一)

FinePix2900Z

| | |
|-------------------------------|---|
| レンズ | 35 ~ 105mm相当(35mmフィルム換算) |
| CCD | 1/2インチ約230万画素CCD |
| 記録メディア | スマートメディア(3.3V) |
| 最多記録枚数(32MB) 1800×1200ピクセル | Fine36枚、Normal70枚、Basic141枚、Hi(非圧縮)7枚 |
| 最短撮影距離 | 約25cm |
| 絞り値 | F3.3 ~ F5.0 自動切り換え |
| シャッター速度 | 1/4 ~ 1/2000秒(AE)、3秒 ~ 1/1000秒(マニュアル露出)メカニカルシャッター併用 |
| 露出制御 | TTL64分割測光プログラムAE(マニュアル撮影時の露出補正可能) |
| 露出補正 | -0.9EV ~ +1.5EV(0.3EVステップ) |
| 内蔵ストロボ | 自動調光方式(発光モード:オート/赤目軽減/強制発光/発光禁止) |
| 液晶ファインダー | 2インチ低温ポリシリコンTFTカラー液晶 |
| 電源 | 充電式リチウムイオンバッテリー |

| | |
|---|---|
| 発売元 | 日商エレクトロニクス株式会社 |
| 価格 | 248,000円(モデル132NAJ)~ |
| 問い合わせ | 03-3544-8396 |
| 本体寸法 | W184 x H184 x D197mm |
| 重量 | 2.8Kg |
| 付属ソフト | Linux2.0、Apache1.3、HTTP1.1、CGI、Perl5.0 |
| プロトコル | SMTP、POP3、IMAP、FTP |
| その他の機能 | DNS、SMB、AppleShareおよびAppleShareIP互換ファイルシステム |
| http://www.pc-net.nissho-ele.co.jp/ | |



筐体の大きさは従来のCobalt Qubeとまったく同じ。内蔵ファンの音も静かだ。

青いキュービックデザインで人気を集めているCobalt Qube 2700Jが新しくなった。イーサネットポートを2つに増やしたり、IPファイアウォール機能を標準装備したりするなど、インターネットサーバーとしての機能がアップしている。



IPアドレスの設定などを行うボタンとディスプレイ。シャットダウンボタンで行う。



管理者サイトの「コントロールパネル」。各種サービスの設定がここだけででき、再起動の必要もない。

ファイアウォール機能を搭載したThinサーバー Cobalt Qube 2

Check!

WWWブラウザによる簡単な設定と管理 SOHOサーバーの機能を丸ごとサポート IPファイアウォール機能を搭載

ウェブ画面も統一感ある魅力的なデザインで、非常にわかりやすく作られている。ほとんどの設定をWWWブラウザでできるので、UNIXコマンドの知識は一切必要ない。

試用レポート

① 本日に15分で設定できた

ケーブルを接続して電源を入れた後、背面のボタンとディスプレイでIPアドレスを設定する。今回はOCNエコノミーの設定をして使ってみた。設定後、再起動するとWWWブラウザから見える状態になる。ここまで約5分。あとは、ユーザーやグループの追加、サービスの選択など、「管理者サイト」画面で細かく設定する。約15分で設定は終わった。

② オフィスツールとして使う

Cobalt Qube 2ではユーザーを「グループ」単位で管理する。そのグループごとにウェブ会議室が作られるので、コミュニケーションツールとして利用できる。また、メーリングリストも簡単に作成できるので、会議室代わりにメーリングリストを運用するのもいいだろう。メーリングリストなら外部の人も参加できる。

③ 多機能がうれしい

Thinサーバーという呼び名は、本来「機能を制限する」ということからきているのだが、Cobalt Qube 2はLinuxでよく使われる機能のほとんどをサポートしている。しかも設定が簡単でUNIXの知識もいらない。とにかく簡単にSOHOサーバーやインターネットサーバーを使いたいユーザーにおすすだ。
(梅垣まさひろ)

オールインワンのSOHOサーバー

インターネットサーバーというと管理が難しいというのが一般的だった。そんな中で注目されているのがCobalt QubeのようなThinサーバーと呼ばれるオフィス向け製品だ。Cobalt Qube 2はWWWサーバーやメールサーバー、DNSサーバーなど、インターネットサーバーでは必須の機能と、オフィスで便利なウィンドウズとマッキントッシュの両方に対応するファイルサーバー機能、DHCPなどを持つ。また、イーサネットポートが2つに増えて、IPファイアウォールとしても使えるようになった。それに、新たにシリアルポートが用意されたため、TAやモデムをつなげばダイヤルアップルーターのかわりにもなるようになった。

小型軽量、そして多彩簡単

これだけの機能を持ちながら、小型軽量でしかもインテリアとして置いておきたいようなデザイン。また、設定のためのウ

テレビ番組をMPEG2形式で録画できる

バイオRシリーズ PCV-R70

Check!

TVチューナーとビデオキャプチャー機能を内蔵
ギガポケットでテレビ番組を予約録画できる
「Adobe Premiere 5.1」をプリインストール

初代モデルからビデオ編集に特化したPCというイメージが強いタワー型のバイオシリーズ。最新の「Rシリーズ」ではさらに一歩進んで、テレビチューナー内蔵のMPEG2リアルタイムエンコーダーボードを搭載し、テレビとの融合を最大のセールスポイントにしている。テレビアンテナをRシリーズに接続するだけで、テレビ番組をデジタルで録画、再生、編集できるまったく新しいタイプのPCだ。

最強のハードウェアに
ビデオ編集機能を満載

テレビ番組をハードディスクに録画するという魅力的な機能を手軽に提供しているのが、Rシリーズにプリインストールされている「ギガポケット」というソフトウェアだ。ギガポケットを使えば、ビデオデッキのようにテレビ番組を予約録画でき、さらに録画した番組を管理することもできる。

こうした機能をバックアップするために、ハードウェアの基本スペックも非常に強力だ。今回試用したRシリーズの最上位機種「PCV-R70」はCPUにペンティアム/550MHzを搭載、128Mバイトのメモリー、20Gバイトのハードディスクと、現時点で最強のハードウェア環境を誇る。

MPEG2動画ファイルは標準画質で約8時間40分（高画質モードでは約4時間20分）の記録が可能だ。動画の取り込みのためのインターフェイスは、デジタルビデオなどの接続用にiLINKと2系統のビデオ入力端子を筐体の前面と背面に装備している。さらにPCカードスロットも備え、メモリースティックのデータを読み取れる。

試用レポート

① インターネットTVガイドと

連動して番組を予約録画できる

ギガポケットでテレビ番組を録画するのは非常に簡単で、チャンネルを選んで録画ボタンを押すだけで。保存するファイル名や解像度がうんぬんといった設定はまったく必要ない。また、録画を続けながらも番組を初めの部分から見られるというデジタルならではの機能がおもしろい。

さらに、インターネットTVガイド(<http://www.tvguide.or.jp/>)と連動して、ビデオデッキのGコード予約のような機能も提供している。TVガイドのページにある「予約」ボタンを押すと、その番組のチャンネルやタイトル、録画開始時間など、必要な情報が自動的に登録される。

② 録画した番組の整理も

スムーズにできる

録画した番組は「ビデオカプセル」という状態で管理されている。このビデオカプセルには番組の映像データの部分と管理情報が独立して保存されている。これにより、ハードディスクがいっぱいになっても、管理情報だけを残しておけば、番組の内容やいつ録画していつ消去したかといったことが確認できる。

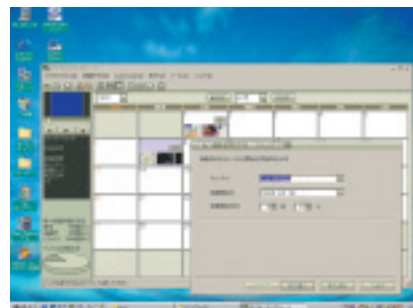
機能的にも仕組み的にもこれだけ完成度の高いものを見せられると、もうビデオデッキはいらないとさえ感じられる。ちなみに、ソニーではギガポケットの別売りはしないと明言しているの、この機能を使いたいユーザーなら「Rシリーズ」は買いた。

(渡辺裕一)

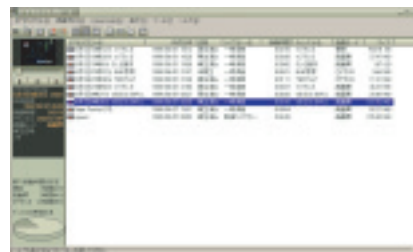
| | |
|-------|---|
| 発売元 | ソニー(株) |
| 価格 | オープンプライス(ディスプレイ別売) |
| 問い合わせ | 03-5454-0700 |
| 本体寸法 | W220 x H352 x D394mm |
| 重量 | 約12kg(本体のみ) |
| 付属品 | キーボード(PS/2)、マウス(PS/2)、i.LINKケーブル(1.5m) x 1、ビデオ接続用変換コネクタ x 2、ビデオ接続ケーブル(1.5m) x 1など |

<http://www.sony.co.jp/sd/ProductsPark/Consumer/PCOM/PCV-R/>

前面下部にはPCカードスロットやi.LINK端子(S400対応の4ピン端子を1つ)、USB、MPEG2リアルタイムエンコーダーボード用入力端子を装備している。



テレビ番組の予約は「予約ウィザード」で必要な情報を入力していくだけで簡単にできる。予約の状況はカレンダー形式で見られるのでわかりやすい。



ビデオカプセルはアイコン表示のほか、リスト形式やカレンダー形式でも表示される。また、番組名やチャンネル、日付などで検索できる。

最低価格レンジのメーカー製PCサーバー

MAGNIA LiTE10/S450AN

Check!

メーカー製PCサーバーでもっとも低い価格帯
コンパクトな筐体サイズ
東芝の大規模な保守センター網が利用できる

| | |
|---|---|
| 発売元 | 株式会社東芝 |
| 価格 | オープンブライズ |
| 問い合わせ | 03-3457-2725 (コンピュータネットワーク事業部) |
| OS | ウィンドウズNTサーバー 4.0 |
| CPU | ペンティアム /450MHz |
| オプション | カセット磁気テープ装置、カートリッジ 磁気テープ装置、無停電電源装置など |
| http://www3.toshiba.co.jp/cn3/pcserver/ | |

筐体の大きさは一般的なデスクトップPCとほぼ同じ。



5.25インチベイに4台と3.5インチベイに3台のデバイスを内蔵できる。空きベイには、ハードディスクや磁気テープドライブなどを増設できる。

東芝のMAGNIA LiTE10シリーズは、ハードウェアをできる限りシンプルにする代わりに、業界でもっとも低い価格レンジを

実現したPCサーバーだ。これまでデスクトップPCを代用サーバーとして利用してきたユーザーにも受け入れやすい、40万円台～60万円台という価格を実現している。

もっともローエンドな
サブエントリーサーバー

PCサーバー市場ではメジャープレイヤーではなかった東芝が、知名度アップとマーケティングプログラムの一掃をフルモデルチェンジとともに行ったのが、MAGNIAシリーズの始まりだった。

実はMAGNIA発表前、東芝のPCサーバー開発陣が「技術には自信があるが、どうすればメジャープレイヤーになれるのか悩んでいる」という話を聞いていた。それまではPCサーバーも小型汎用機と同じような、極端に業務寄りのマーケティング手法をとっていた。MAGNIAで行ったマスに向けた製品のアピールは、その答えだったのかもしれない。まったく同じ技術を用いた製品でも、デザインやユーザーへの見せ方で、製品のイメージは大きく異なるものだ。

実際のMAGNIAシリーズは、企業向けサーバーとして十分な機能を有していた従来製品のイメージを引き継ぎつつも、デルコンピュータのような直販系ベンダーの製品に近い新しいイメージを与えられ、価格的にも競争力のある製品群に仕上がっていた。そして今回紹介するMAGNIA LiTE10シリーズでは、エントリーサーバーのさらに下に位置する「サブエントリーサーバー」と

いう分野の提案を行っている。

ちょっとしたサーバー業務にデスクトップPCを流用するユーザーは少なくないし、中には自作PCでサーバーを構築しているユーザーもいるだろう。そうしたユーザーが、いきなり100万円を超えるサーバーに投資するのは抵抗がある。そこに“サブ”なエントリーサーバーの存在価値がある。試用したMAGNIA LiTE10/S450ANは、その中では最も最上位の機種だ。

マザーボードの構成は
ほぼデスクトップPCと同様

プロセッサにはペンティアム /450MHzを搭載。ローコスト化のためか、マルチプロセッサ構成は採用されていない。

マザーボードの構成は一般的なPCとほぼ同じで、インテル製440BXチップセットにAGP×1、PCI×4、PCI/ISA×1、ISA×1の-slot構成が採用されている。サーバー的な仕様を見ることができるのは、メモリスロットが4バンク用意されていることだ。メモリスロットには標準で128MバイトのECC DIMMが装着されており、1バンクあたり最大256MバイトのDIMMをサポートする。

PCIスロットには、LANカードとアメリカンメガトレンドズ(AMI)製の16Mバイトキャッシュ付きのRAIDコントローラーが装着されている。AMIはBIOSやマザーボードベンダーとしても著名だが、RAIDコントローラーボードのブランドとしてもマイレックスと並んでよく使われているものだ。

付属ソフトウェアには簡易設定ツールの

「SetupInstructor LiTE」とサーバー管理ツールの「HarnessEye LiTE」があり、初期セットアップとDMIによるネットワーク経由の管理をサポートしてくれる。

試用レポート

① 採用するハードウェアには十分に配慮を

東芝がサブエントリーサーバーと呼ぶように、ルックスも筐体構成も、PCサーバーでもっともローエンドに位置する製品だ。上位機種が装備するような同一機能を複数搭載する多重構成は一切持たず、マルチプロセッサによる将来的なパフォーマンスアップといった拡張性も持たない。その代わりに価格を安く抑え、信頼性の部分は東芝のサポート網でまかなおうということだ。

ただ、多重構成を採らないだけに、採用するハードウェアには十分に配慮してほしい。たとえば、グラフィックスがオンボードPCIではなく外部のAGPスロットに装着されている点だ。本機には8Mバイトビデオメモリーを搭載するi740採用の3Dグラフィックスボードが装備されているが、サーバーでこの機能を活用することはない。

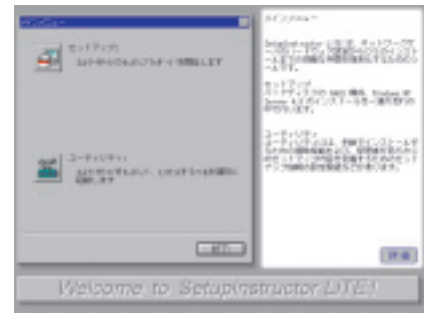
また、i740はウィンドウズ95/98環境では実績は多いが、ウィンドウズNT環境では

利用されるケースが少ないというデメリットもある。できれば、もう少しドライバーの実績のあるチップをPCIオンボードで搭載してほしい。

ちなみに、ウィンドウズNTでAGPのグラフィックスカードを機能させるためにはサービスパック3以降が必要となる。この点は、本機には簡易セットアップツールが付属しているためサービスパック4を自動的にセットアップできるので問題はない。

② 信頼性の部分を

東芝のサポート網でカバーデスクトップPCを流用したPCサーバーというのは、どのベンダーも様にラインナップしており、製品として人気のある分野だ。しかし、多くのベンダーはワークステーション用の筐体とマザーボードをPCサーバーに転用しているのに対して、本機は台湾のギガバイト製マザーボードを採用している。自社で品質をコントロールしにくい海外製マザーボードをPCサーバーに採用するのは、技術力を有する東芝らしからぬ選択だと思う。もちろん、それも他社製エントリーサーバーより数十万円も安い40万円台～60万円台という価格設定を実現するためのものだろう。サーバーはハードウェアそのものの信頼性はもちろんだが、メーカ



簡易設定ツール「SetupInstructor LiTE」は、OSのインストールからハードウェアの設定までを簡素化するためのツールだ。



サーバー管理ツール「HarnessEye LiTE」は、ハードウェアの管理からOSの監視までを行うツールで、標準で添付されている。

ーや販売ディーラーのサービスに対して対価を支払うものだ。その意味では東芝という広いサービス網をもつメーカーが低価格PCサーバーをラインナップしていることにこそ意味があるのかもしれない。

(本田雅一)

MAGNIA LiTE 10のラインナップ (Pentium /450MHz 搭載モデル)

| 機種名 | MAGNIA LITE10 | | | | |
|----------------------|--|-----------------------|------------------------------------|----------------------------|---------------------------|
| モデル名 | S450E | S450EN | S450 | S450N | S450AN |
| 標準価格 (税別) | 438,000円 | オープンプライス | 580,000円 | オープンプライス | |
| CPU | Pentium /450MHz | | | | |
| メインメモリー(ECC付き)標準(最大) | 128Mバイト(1Gバイト) | | | | |
| 補助記憶装置(HDD) | 標準 | 4.3Gバイト×1(Ultra DMA) | 9.1Gバイト×1(Ultra Wide SCSI) | 9.1Gバイト×2(Ultra Wide SCSI) | |
| | 最大(本体内蔵) | 8.6Gバイト(4.3Gバイト×2台) | 36.4Gバイト(9.1Gバイト×4) | | |
| RAIDコントローラ | オプション | | | 標準 | |
| SCSIインタフェース | Ultra SCSI × 1Ultra Wide SCSI × 1 | | | Ultra Wide SCSI × 1 | |
| LANインタフェース | 100BASE-TX/10BASE-Tイーサネットカード標準 | | | | |
| デバイスベイ | 5.25インチ | 4(CD-ROM装置が1スロット占有) | | | |
| | 3.5インチ | 3(FDD、HDDが2スロット占有) | | | 3(FDD、HDDが3スロット占有) |
| I/Oスロット | PCI | 4 (LANカードが1スロット占有) | 4 (LANカードとSCSIカードが2スロット占有) | | 4(LANカードとRAIDカードが2スロット占有) |
| | ISA | 1 | | | |
| | PCI/ISA | 1 | | | |
| 添付ソフトウェア | 簡易設定ツール「SetupInstructor LiTE」、サーバー管理ツール「HarnessEye LiTE」 | | | | |
| プレインストール | WindowsNT Server4.0 (10クライアント版) | | WindowsNT Server4.0 (10クライアント版) | | |
| 消費電力 | 最大180W | | | | |
| 本体寸法(W×H×D) | 195×450×499mm | | | | |
| 本体質量(最大) | 14kg | | 16kg | | |

| | |
|---|------------------------|
| 発売元 | ノキア・モバイル・コミュニケーション株式会社 |
| 価格 | オープンプライス |
| 問い合わせ | 03-5388-8929 |
| 本体寸法 | W49 × H114 × D23mm |
| 重量 | 約 92g |
| 連続待受時間 | 約 220 時間 |
| 連続通話時間 | 約 105 分 |
| 付属品 | 電池パック、ACアダプター |
| http://www.nokia.co.jp/products/nm207/ | |

日本初の赤外線通信機能を持った携帯電話

DoCoMo NOKIA NM207

Check!

WorkPad とつながら赤外線ポートを搭載
アウトルックのデータを転送できる
10件まで登録できるスケジュール機能



アクティブスライドを採用。スライドをオープンしたとき、マイクがちょうど口元にくるようになっている。



本体側面に赤外線通信ポートを装備している。通信できる範囲は25cm以内。



NM207ならモデムを接続しなくてもWorkPad c3でインターネットに接続できる。



ノキアはフィンランドが誇る世界でトップシェアを誇る携帯電話機メーカーだが、これまで日本ではノキア製の携帯電話の人気は今ひとつだった。そのノキアが満を持して発売するのがこのNM207だ。NM207は日本初の赤外線ポートを内蔵する、モバイルユーザーに最適な携帯電話だ。

赤外線ポート内蔵

ノキアのNM207は、最近の携帯電話としては92グラムと重い部類に入り、流行の「着メロ編集機能」を装備していないなど地味なイメージの携帯電話だが、そんな不満点をすべて払拭してしまう機能が搭載されている。それが、赤外線通信機能だ。NM207に搭載されている赤外線ポートはNM207同士でメモリーダイヤルを交換できるだけでなく、ノートパソコンやPDAの赤外線ポートとデータ通信ができる。もちろん、インターネットにも接続可能だ。

vCardで電話帳を送受信

また、NM207はアップルやIBM、AT&Tなどで構成されるVersit Consortiumで提唱された電子的な名刺交換の共通データフォーマット「vCard」や「vCalendar」をサポートしている。そのため、アウトルックなどのvCardやvCalendarをサポートしたアプリケーションを利用すれば、携帯電話メモリー編集ソフトなどを利用せずに、ノートパソコンと携帯電話だけで電話番号やスケジュールを送受信できる。

なお、このvCalendarを利用したスケジューラーは、用件を10件まで登録できる。

試用レポート

① 設定は非常に簡単

NM207を使ってインターネットに接続するのは非常に簡単だ。赤外線ポートを装備したノートパソコンなどであれば、データカードがなくても通信できる。

パソコン側の設定は、ウィンドウズ98ならばモデムに「標準28800bpsモデム」を選択して、接続ポートを「仮想赤外線COMポート」と設定する。たったこれだけでダイヤルアップ接続ができてしまう。

② WorkPadで最強の

モバイル環境を実現する

NM207はWorkPad(PalmIII、PalmV)でデータ通信をする際に威力を発揮する。WorkPadでインターネットをする場合、今までは別売りの外付けモデムを利用する必要があったが、NM207を利用すればシェアウェアのIrlink(<http://www.iscomplete.org/Irlink/Irlink.htm>)で赤外線ポートを利用してインターネットに接続できる。もちろん、WorkPadの住所録やスケジュールをNM207に転送することも可能だ。

③ 関東地方では入手が困難

NM207は、ドコモ東北などではすでに2月から販売されており、6月からは関東を除く全国で販売される。しかし、関東地区を管轄とするNTTドコモ中央での販売は今のところ未定だ。関東地区でNM207を入手するにはショップの通信販売を利用するか、販売されている地域まで出向いて購入するしかないのが現状だ。(編集部)



あらゆるドキュメントをPDFファイルに変換

Adobe Acrobat 4.0

Check! 日本語版

オフィス97やワード98との連携機能
ウェブページのキャプチャー機能
オンライン共同作業機能の強化

アドビシステムズ社が開発したPDF (Portable Document Format) は、ハード、ソフトの解説書や仕様書、広報資料のオンライン配布によく使われる。アcrobat 4.0は、このPDF形式のファイルを作成したり編集したりするツールの最新バージョンだ。

強化されたPDF変換機能

アcrobatには、PDFライターとディステイラーの2つのPDF変換ツールが用意されている。PDFライターは、テキスト中心のドキュメント用で、短時間でPDFファイルに変換できる。一方、ディステイラーはグラフィックが多いドキュメント向きで、変換に時間はかかるがより高品質の出力が得られる。

PDFへの変換機能が強化されたのが新バージョン4.0の特徴で、2つのツールのアイコンにファイルをドラッグするだけで変換できる。さらに、ウィンドウズ版のマイクロソフトオフィス97やワード98で作成したファイルなら、アcrobatのアイコンまたはウィンドウに文書ファイルをドロップするだけでいい。

ウィンドウズ版は、ウェブページをPDFファイルに変換することもできる。ホームページ録画ソフトのようにURLと階層レベルを指定すると、指定したウェブページをアcrobatに取り込んでPDFファイルに変換してくれるのだ。変換後もページ中のリンクは有効で、設定によってはリンク先のページまでPDFに変換できる。

ネットワーク共同作業を支援する新機能

PDFファイルは、マニュアルなどに使われるケースは多い。だが、PDFは単にディスプレイ上でドキュメントを表示するため

の形式ではない。アcrobatを使えば、ネットワークを介して書類を校正する用途にも利用でき、4.0には校正のための注釈ツールも用意されている。チェック箇所をマーキングする「マーカー」、コメントを記入する「メモ」、チェックしたことが一目でわかる「スタンプ」など、注釈ツールは全部で12種類ある。

また、元のドキュメントに使われているフォントがインストールされていれば、PDFファイルのテキストを修正することもできる。さらに、誰がチェックしたかを電子的に証明する電子署名機能も加わった。前バージョンもファイルへのアクセスを制限するセキュリティ機能を備えていたが、4.0では電子署名を利用することにより、オンラインでの作業の信頼性がより高まっている。ただし、電子署名はウィンドウズ版でしか使えない。

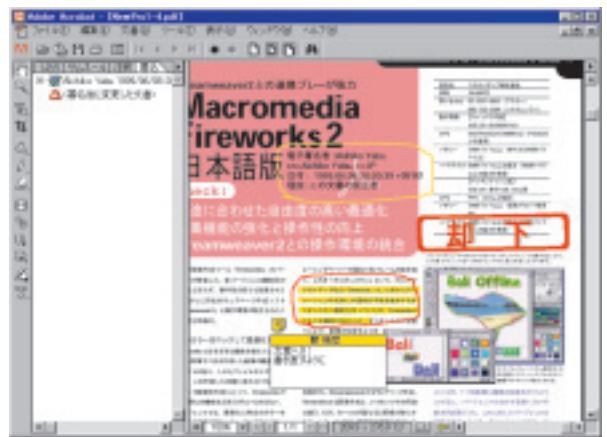
試用レポート

① 気になるウィンドウズ版とマッキントッシュ版の違い

仕事柄、電子メールで送ってもらったPDFファイルで、原稿の校正をすることがある。だが、今まではアcrobatを持っていなかったため、いったんアcrobatリーダーでPDFファイルを印刷し、そこに修正を入れてFAXで先方に送り返すしかなかった。アcrobatがあれば、そんなバカげたことをやる必要はない。すべてコン

| | |
|---|-------------------------------|
| 発売元 | アドビシステムズ株式会社 |
| 価格 | オープンブライズ |
| 問い合わせ | 03-5423-1860 |
| 動作環境 | 【ウィンドウズ版】 |
| CPU | i486およびPentiumまたは100%互換のプロセッサ |
| OS | ウィンドウズ95/98/NT4.0(SP3以降) |
| メモリー | 32Mバイト以上(NTでは64Mバイト以上) |
| 動作環境 | 【マッキントッシュ版】 |
| CPU | PowerPC以上 |
| OS | 漢字Talk7.5.3またはMacOS7.6以降 |
| メモリー | 32Mバイト以上 |
| http://www.adobe.co.jp/product/acrobat/ | |

PDFファイルには、12種類のツールを使って注釈を付けたり、電子署名を入れたりできる。



ウェブキャプチャー機能では、JavaアプレットやJavaスクリプト、スタイルシートはまだサポートされていない。

コンピュータ上で作業できるのだ。

今回、アcrobatを使ってみてPDFの便利さをあらためて実感した。同時に、PDFファイルへの変換が実に簡単なことに驚いた。アcrobat上で、ページの順番を入れ替えることもできる。ウィンドウ左にサムネイルパレットを開き、そこでページアイコンをドラッグするだけでいいのだ。

簡単、便利と感心するばかりのアcrobat 4.0だが、気になったのがウィンドウズ版とマッキントッシュ版の機能の違いだ。ウェブページのPDF変換も電子署名も、マッキントッシュ版では使えない。マッキントッシュ版でもなんとかこれらの機能をサポートしてほしいと思う。(藪 暁彦)



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp